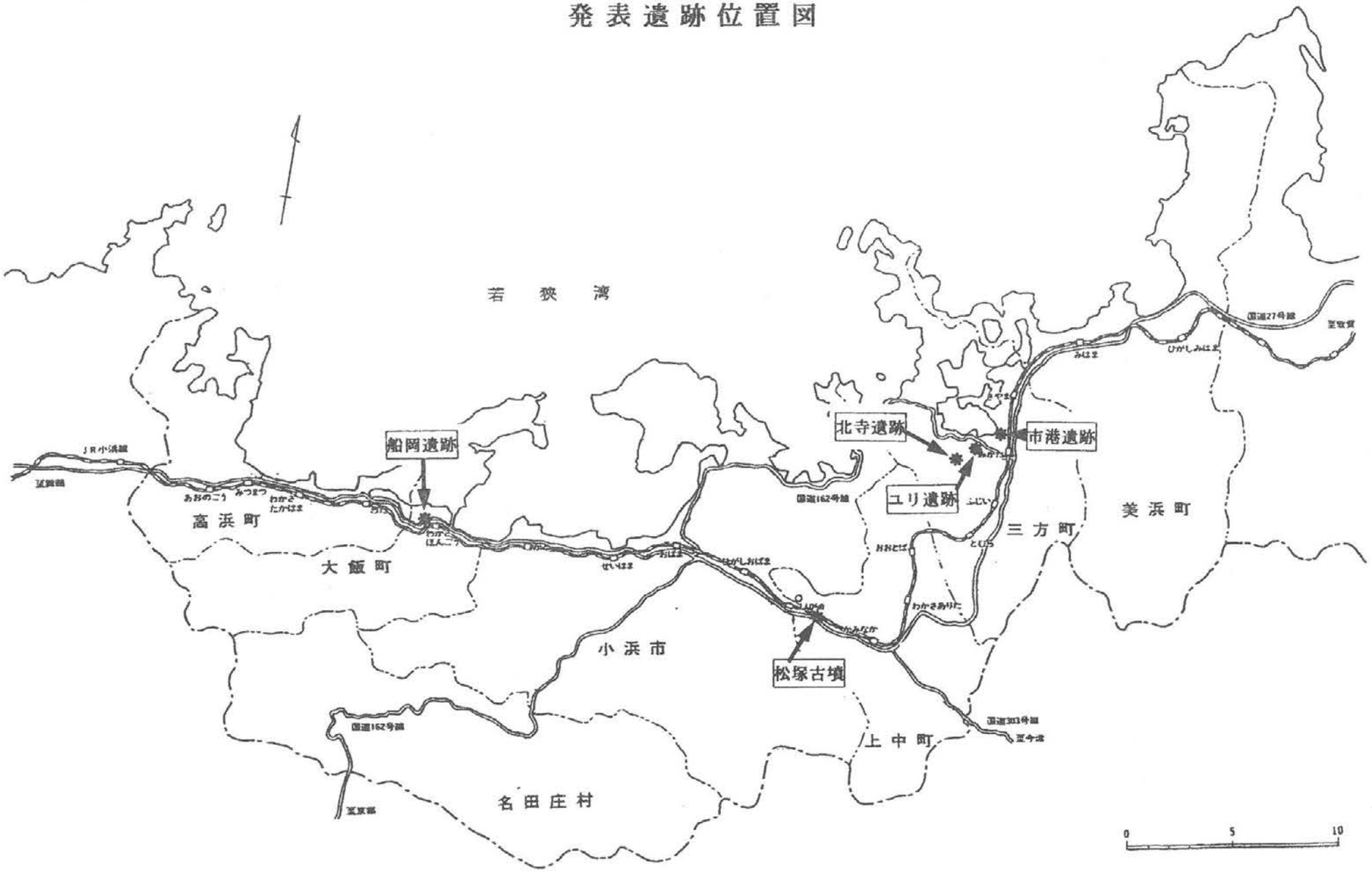
平　成　２　年　度

若狭地域における発掘調査の成果

平成３年３月２４日（日）

福井県立若狭歴史民俗資料館

発表遺跡位置図



遺　跡　名	市港遺跡
所　在　地	三方町三方１７号深川、２９号三反田
調査原因	県営圃場整備事業
調査期間	発掘調査作業　三反田地区　平成 2年5月 2日~ 5月29日 〃　深川地区　7月31日~ 9月14日 出土遺物整理作業　9月18日~10月13日 〃　平成2年12月4日~3年2月15日
調査主体	三方町教育委員会
調査担当者	三方町立郷土資料館　田辺常博、青池晴彦
調査面積	1,650.0㎡(三反田地区1,545.0㎡、深川地区105.0㎡)
遺跡の時期	三反田地区　縄文時代早期、中期末～後期前半、古墳時代後期、奈良時代 深川地区　古墳時代～飛鳥時代

〔調査の概要〕

市港遺跡は、鱒川流域平野東側の山古川、観音川により形成された扇状地面の海抜３．０ｍ～６．５ｍの水田に拡がる。遺跡全体の地質状況は、花崗岩質の砂や礫が厚く堆積しているが、一部西側の低地では、湖沼性の堆積層がみられる。また、遺跡南側の水田には、中世の屋敷跡状の遺構を残す舘薮遺跡があり、周辺には、縄文時代から中世にいたる人々の生活の跡もみられる。

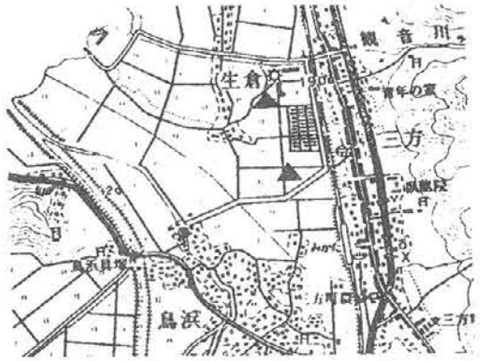
当初、圃場整備予定区域の三方町鳥浜２０号城縄手、三方１７号深川、２８号市港、２９号三反田の水田を中心に平成元年１１月６日から１２月２０日まで範囲確認調査を行ない、この調査結果に基づき今回三方１７号深川、２９号三反田地区で本調査を実施した。なお、この本調査の実施期間は三反田地区が５月２日から５月２９日、深川地区で７月３１日から９月１４日まで行なった。

調査の結果は、三反田地区では遺構面として砂層が流水により削られた自然流路が検出され、流路上面で奈良時代の須恵器杯、土師器杯などが出土し、流路の底からは、古墳時代後期の須恵器杯が出土している。

深川地区では、範囲確認調査所見と同様古墳時代後期を主体とする遺物包含層下の砂層から円形や楕円形を呈する掘りこみの穴が多く検出された。砂層が当時の基盤面とすると、柱穴とも考えられるが、遺構の性格はよくわからない。

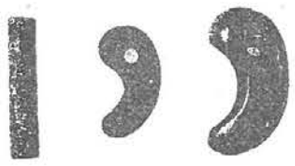
遺物は、縄文土器（早期、中期末～後期前半）、土師器、須恵器、製塩土器、手捏土器、玉類などが出土している。縄文土器は、三反田地区で出土しており、外面に楕円押型文、内面に斜行沈線を施した早期の高山寺式の深鉢の大型破片などがみられる。

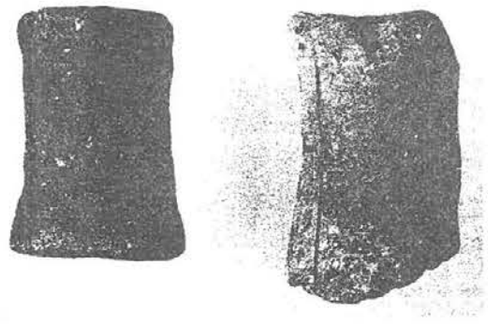
また、深川地区では祭祀遺構がともなっていると考えられ、土師器の小型丸底壺、手捏土器、勾玉、臼玉などの玉類、石製有孔円板、また浜禰ⅡＢ式を主体とする製塩土器、支脚など古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての特徴ある遺物が出土している。

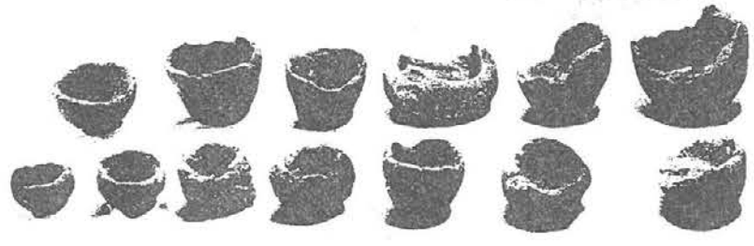


遺跡位置図

遺跡遠景（上空より）


勾玉、管玉　右端勾玉高さ2.0cm


支脚　左側高さ8.5cm、上径5.0cm 下径5.6cm


手捏土器　上段左端器高3.0cm、口径5.3cm

遺　跡　名	ユリ遺跡弁天地区
所　在　地	三方町鳥浜１１４号弁天、１１５号湯里
調査原因	県営圃場整備事業
調査期間	発掘調査作業　平成2年10月16日～12月 1日 出土遺物整理作業　平成3年 2月16日～ 3月15日
調査主体	三方町教育委員会
調査担当者	三方町立郷土資料館　　田辺常博、青池晴彦
調査面積	２０５㎡
遺跡の時期	縄文時代中期～後期前半、弥生時代後期

〔調査の概要〕

ユリ遺跡は、鰣川流域平野西側の高瀬川左岸域の鳥浜９７号西夏浦、９８号東夏浦、１１２号友直、１１３号加屋、１１４号弁天の海抜２.０～３.０ｍ前後の低湿田および向笠１０１号西夏浦、鳥浜１１５号湯里などの周辺の畑に遺跡の拡がりがみられる。

また、この遺跡は、昭和初年ごろから知られており、山添いの梅園、水田の耕作中に弥生土器、磨製石斧などの遺物が表採され、遺跡台帳では弥生時代を主体とする遺物散布地として登録されていた。

水田部の調査地は、基本的には夏浦地区と同じく低湿地性の泥炭土層を呈し、縄文時代での湖沼地に想定されるが、土層の状況は夏浦地区と比較し有機質の分解がすすみ、砂質土の互層がみられる。

遺跡東よりの山際に設定したＹ′６トレンチでは、現在の水田面より約２０㎝下の水田床土付近の有機物を含む粘性土の３層から弥生後期土器及び木製品が出土している。また、水田面より約９０㎝下の海抜１.３ｍ付近の有機性砂質土内から丸木舟(ユリ遺跡出土２号丸木舟)が出土している。この丸木舟は、舟へりの立上りに腐食があり、舟尾、舟首の確認が困難であるが、現存長４ｍ９０㎝、現存最大幅４８㎝を測る。なお、丸木舟の時期は、Ｕ′１０トレンチ出土の縄文土器などから縄文時代中期末に比定されている。

Ｕ′１０トレンチでは、有機性砂質土の互層が確認され、海抜１.３ｍ付近で縄文中期末、また海抜０.５ｍの下層から縄文中期初頭の縄文土器が出土している。

遺跡中央付近の山鼻先端部に設定したＨ′１７トレンチでは、現在の畑面より、約１２０㎝下の海抜１.７ｍ付近の泥炭土層内から丸木舟(ユリ遺跡出土３号丸木舟)が出土している。この丸木舟は、舟へり部分を欠損し、やや深みのある舟底全体が残り、現存長５ｍ８０㎝、現存最大幅３０㎝を測る。丸木舟の時期は、縄文時代中期末以降に比定される。

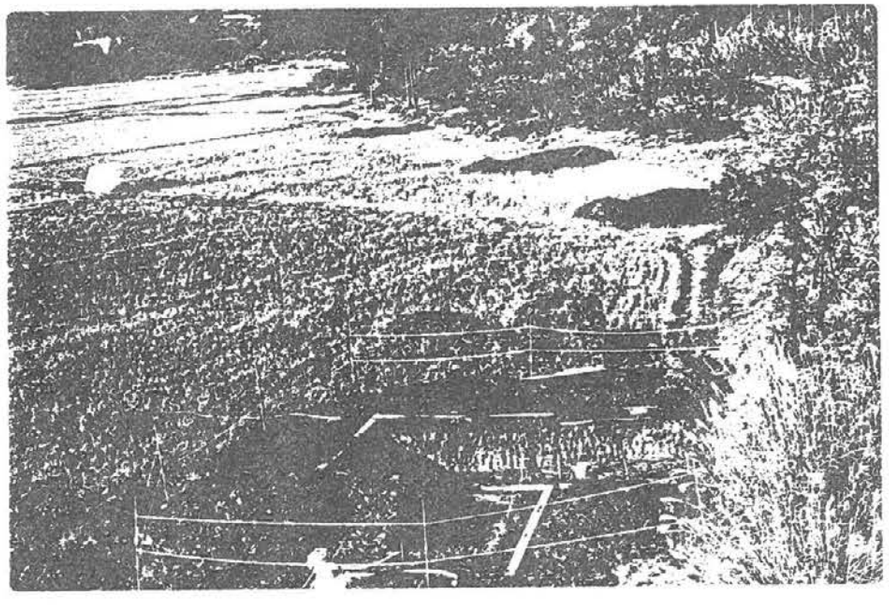
なお、畑に設定したトレンチでは、Ｏ′Ｐ′１３・１４の下層の有機質粘土から縄文中期末頃の縄文土器が数点出土したのみで、良好な遺物包含層を残していない。

このように、弁天地区は、弥生時代後期、縄文時代後期、中期の遺物包含層を残している。縄文海進時の縄文時代では、湖沼地だった調査地が、弥生時代ごろからの海退により、湖沼が低湿地化を呈しながら沖積地が形成されたが、弥生時代では後期ごろから人々の生活の営みがみられる。

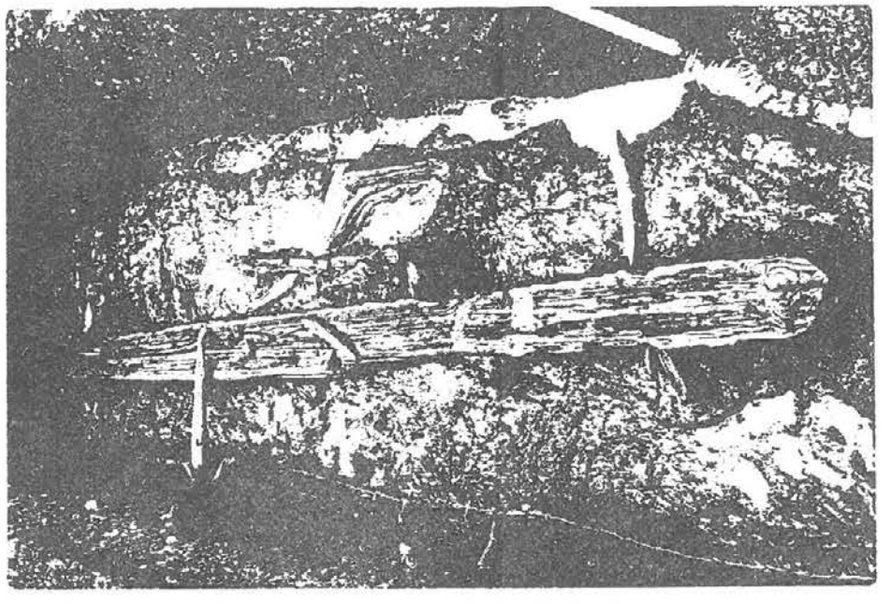
これらの調査結果により、圃場整備による山際の大型水路(排水Ｕ字溝Ｈ９００×Ｂ７００)が、設置されれば、遺跡の破壊を免れない。このため、弁天地区については、貴所耕地課、三方町耕地課、地元土地改良役員、町教委と協議により山際の排水路設置を取りやめ、幹線農道沿いに排水路を設置するという工法変更を行い、調査済みのトレンチは埋め戻す遺跡保存の方法を図った。しかしＹ′６トレンチ付近で確認されている水田床土部分での弥生後期の遺物包含層については、表土の扱い方法の結果により調査を要する。

なお、Ｙ′６及びＨ′１７トレンチより出土している２艘の丸木舟については、造形保存を計り公開保存するため丸木舟及び壁面の取上げを行う。

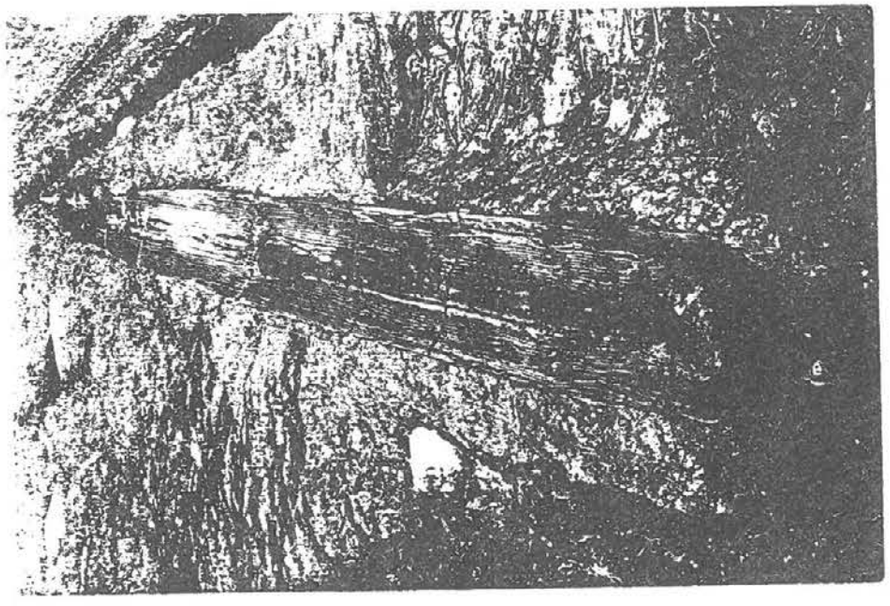
遺跡位置図



水田部の調査地



ユリ遺跡出土３号丸木舟



ユリ遺跡出土２号丸木舟

遺　跡　名	北寺遺跡
所　在　地	三方町向笠５３号北寺、５４号柿ノ下、５５号江振
調査原因	県営圃場整備事業
調査期間	発掘調査作業　　平成２年５月３０日～７月１１日 出土遺物整理作業　　７月１２日～７月１４日
調査主体	三方町教育委員会
調査担当者	三方町立郷土資料館　田辺常博、青池晴彦
調査面積	８２．５㎡
遺跡の時期	縄文時代中期中葉から後期中葉

〔調査の概要〕

北寺遺跡は、鰣川流域平野西側の高瀬川左岸域の海抜５ｍ前後の水田から背後の扇状地面の梅園まで拡がりをもち、水田部は、低湿地遺跡の様相を呈している。

今回は、圃場整備予定区域の５４号柿ノ下、５５号江振の水田を５月３０日から７月１１日まで調査を行なった。

調査は、平成２年度の夏施工とされる水田に試掘用溝６箇所（Ｆ３７，Ｆ４０，Ｆ４１，Ｆ４２，Ｆ４４，Ｆ４５トレンチ）を設定し、遺跡の範囲と性格究明につとめた。

背後に広がる畑地のほぼ中間点に位置し、一番西側に設定したＦ３７トレンチでは、良好な遺物包含層が残されておらず、出土遺物も少量であった。また木製品等の植物遺体を残す泥炭層も分解が進み粘性を呈するところが多く残りが良好でなかった。このことにより、遺跡の西外れに近いと考えられる。

Ｆ４０，４１トレンチは、良好な遺物包含層が確認されず遺物の出土点数も少量であった。なお、後世の層位撹乱がみられた。

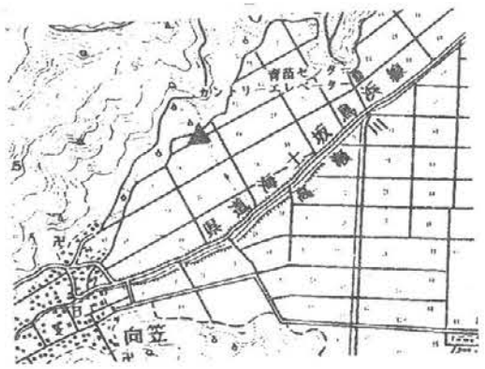
山鼻の先端部付近に設定したＦ４２、４４トレンチは、上層には背後に開ける小扇状地面の谷水の影響により流れ込んだ有機質砂礫土が堆積している。この砂礫土の中には、縄文土器や石器などの遺物が多量に混在しており、背後のなだらかに拡がる小扇状地が当時の生活の場だったことを裏づけている。また下層には、泥炭土が堆積している。この泥炭土は、良好な遺物包含層で大型の縄文土器片、丸木弓、カゴ状の編物などが出土し、ヌマガイ、サザエなどがブロック状に堆積した貝層が確認されている。このことから、山鼻の湖沼地に生活遺物、食糧が投棄されていたと考えられ、遺跡は小規模ではあるが形成状況が鳥浜貝塚と類似している。

なお、設定したトレンチの長さは、南北方向に１０ｍであるが、遺物出土状況からまだ、南へ遺物包含層が延びていると思われる。

山鼻の内湾部に設定したＦ４５トレンチは、背後地からの谷水の影響による砂礫の堆積が少なく、泥炭土が厚く堆積しており、湖沼地の深みと思われ、出土遺物が少量で遺跡の東外れに近いと考えられる。

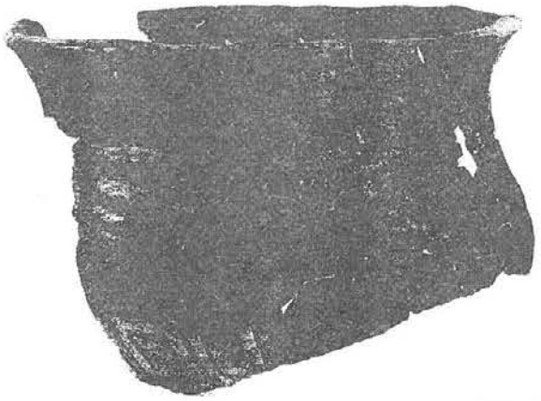
以上、調査を行なったトレンチの概要を記したが、全面的な遺跡の広がりが狭く、Ｆ４２，４４トレンチ付近を中心としてほぼかぎられた箇所に広がりをもっていることを確認することができた。

なお、調査により縄文土器がコンテナ１５箱、石器として磨製石斧、独鈷石、石鏃、石匙、石錘、磨石、叩石、凹石、石皿、石棒といった多様な種類が出土している。木製品としては、櫂、丸木弓、山刀形木製品、木製容器、板材、またカゴ状網物など貴重な遺物が多量に出土し、鳥浜貝塚の縄文時代前期以後の後期を中心とする鰣川流域での低湿地遺跡の性格を知る上に貴重な資料を提供している。



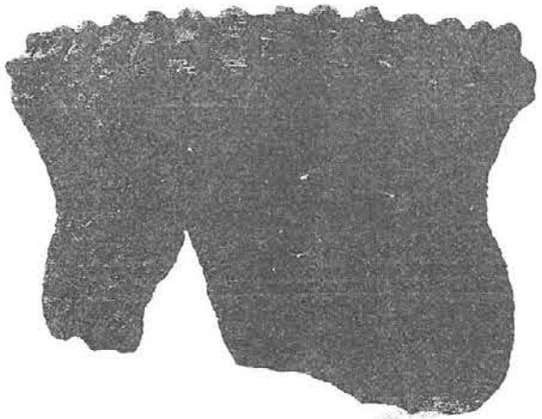
遺跡位置図

遺跡遠景（北西方向より）前面の梅園は住居地に想定される。

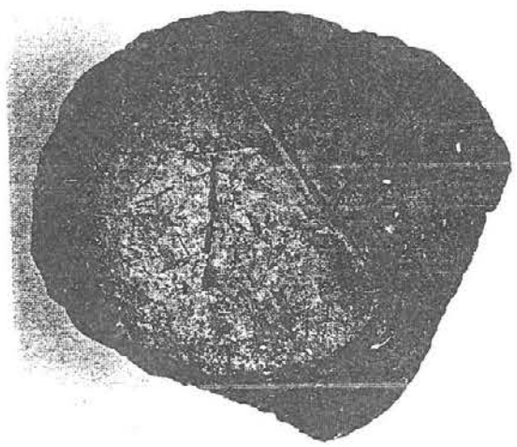


縄文中期土器（鉢形）　器高14.4cm、口径21.3cm

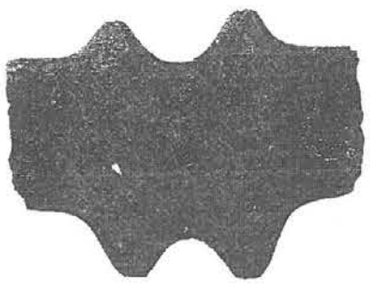
縄文後期土器(注口土器の注口部)
最下段　長さ10.5cm



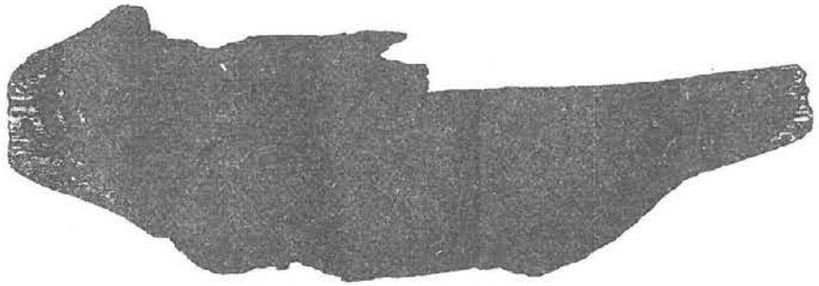
縄文後期土器（鉢形）　器高14.2cm



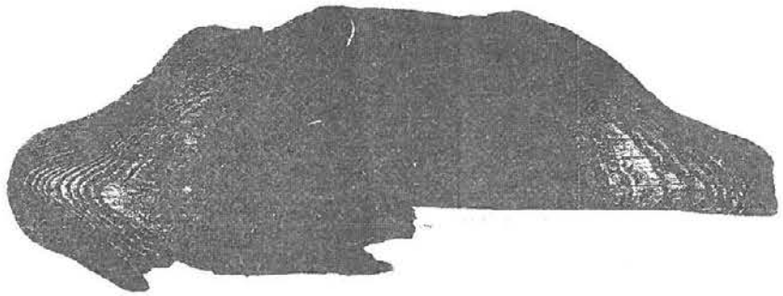
縄文後期土器(底部・木の葉圧痕)　底部直径7.0cm



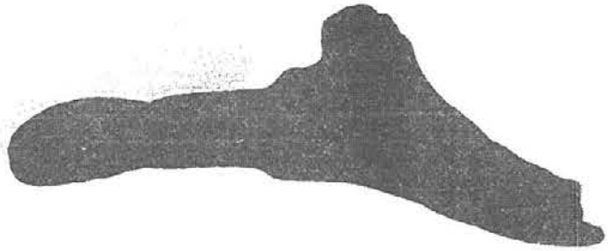
独鈷石　現在長8.0cm
幅　6.2cm



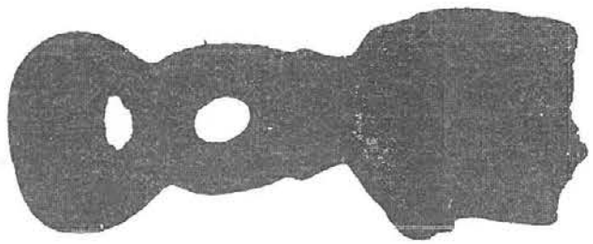
注口付浅鉢形木製容器（表面）　現在長　50.0cm



注口付浅鉢形木製容器（裏面）



把手付木製容器（側面）　現在長17.0cm



把手付木製容器（正面）

遺跡の名称	松塚古墳
遺跡の場所	遠敷郡上中町日笠６０号－２２・３９
委託業務名	県圃「野木地区」所在　松塚古墳発掘調査
調査の期間	平成２年９月２２日から１２月２６日
調査面積	約６５０㎡
調査主体	上中町教育委員会
調査指導	県立若狭歴史民俗資料館

Ⅰ・調査の原因について

上中町日笠は、昭和１０年に国指定史跡となった上船塚古墳、下船塚古墳をはじめ、横穴式石室の露出した玉塚古墳、縦縄古墳など数多くの古墳が今も点在する遺跡の宝庫といえる土地であります。

今回調査した松塚古墳は、遺跡の多いこの地を福井県の遺跡分布調査で昭和６２年に踏査した際、小字野寺町道２１号線沿いの水田下黒褐色の土の中から円筒埴輪の破片を多数表採したことで古墳の存在が予想されました。それ迄は当古墳の存在については、伝承としても残っていない全く未知のものでした。

それが、この地が平成元年度より第二次の圃場整備事業が実施されることとなったため、昭和６３年度に日笠地区の遺跡確認の調査がされました。

３本の試掘壙の結果から、当地には古墳のまわりに存在する周溝の存在が確認されました。それで、現在では削平されてしまっていますが丸い形の古墳（円墳）があったことが発見できたのです。

以上、遺跡の確認がされましたので、今回の本調査ということになったわけです。

Ⅱ・調査について

町道がこの古墳の南側を通っているため全面発掘はできませんでしたが今回の本調査発掘（約６５０㎡）により、直径約１９ｍ、古墳のまわりをめぐる周溝の幅約４ｍの丸い形をした円墳であることが確認されました。

死者を埋葬した施設については古墳自体がほとんど後代の人為的削平を受けているため明らかではありません。いつ削平を受けたかも不明ですが、ただ明治のはじめに作成された地図によりますと、東西にはしる旧道が水田の中を北側に迂回しており、また小字名も現在古墳のある場所は野寺といいますが、昔は松塚という小字名であったことがわかりました。つまりこの古墳をさけて迂回するかたちで古くは道がついていたことが考えられるわけです。

この古墳の命名も旧の小字名により松塚とした次第です。

Ⅲ・出土遺物について

出土遺物としては、円筒埴輪（土管状の焼きもので古墳の回りに立て並べるもの・川西編年第Ⅴ期併行のもの）の破片が、コンテナケース（３０ℓ）に約２０箱ほど出土しました。出土した埴輪片のほとんど全てが、周溝の中から発見されました。これは、本来古墳に立てられていたものが、周溝に崩落したためと考えられます。

また、土器（須恵器、土師器）の破片も数十点出土しました。特に古墳の築造された年代を決定する資料となる須恵器の壺の口縁（ＴＫ１０併行のもの）の出土により、松塚古墳は６世紀前半の今から約１４５０年ほど前に築かれたことが判明しました。

また特筆すべきは、埴輪のうちでも円筒埴輪のほかに、形象埴輪である盾形の埴輪片が約４０点ほど出土したことです。盾形埴輪は、武威の性格をもち聖域を守る意味をもつものです。県内の出土として、他に丸岡町の六呂瀬山３号墳と、上中町脇袋西塚古墳の２例しか知られていませんが、共に小さな破片が１、２点発見されたにすぎません。

しかし、松塚古墳では、大小約４０点出土し、もとに近い形に復元できそうです。表面には連続する三角文様が線刻され、そのあと赤い顔料が塗られています。古墳の規模の割にこうした埴輪をもつことができたのは、上船塚、下船塚の両古墳の墓の主と密接なつながりを有していたからでしょう。

Ⅳ・遺構について

次に、遺構の特徴として、円墳の周囲には約４ｍの幅で溝がめぐっています。これは、墓域を区画する小規模なもので、自然の滞水はあったことでしょう。また、溝に埋まった土からは円礫や角礫などはほとんど全く検出されませんでしたので、古墳には昭和６２・６３年に上中で発掘された向山１号墳に葺いてあった葺石のようなものはなく、天徳寺の今はなき大円墳であった丸山塚古墳のような盛り土したままの古墳であったようです。（つけ加えますと丸山塚古墳は埴輪を持たない古墳でした。）

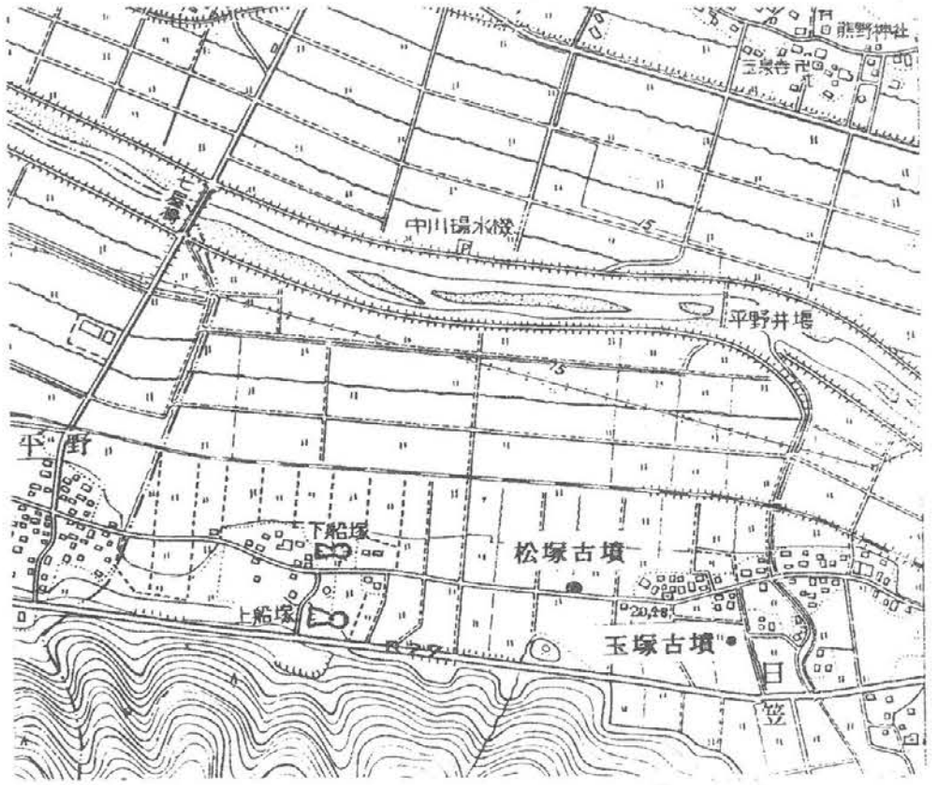
次に、この周溝は円墳を全周するのではなく、西に位置する下船塚古墳

の方向よりやや北側の北西方向で約２ｍほどとぎれたところがありました。つまりここに、溝の外から古墳へわたる墓道のような性格をもった陸橋の存在が確認できたわけです。

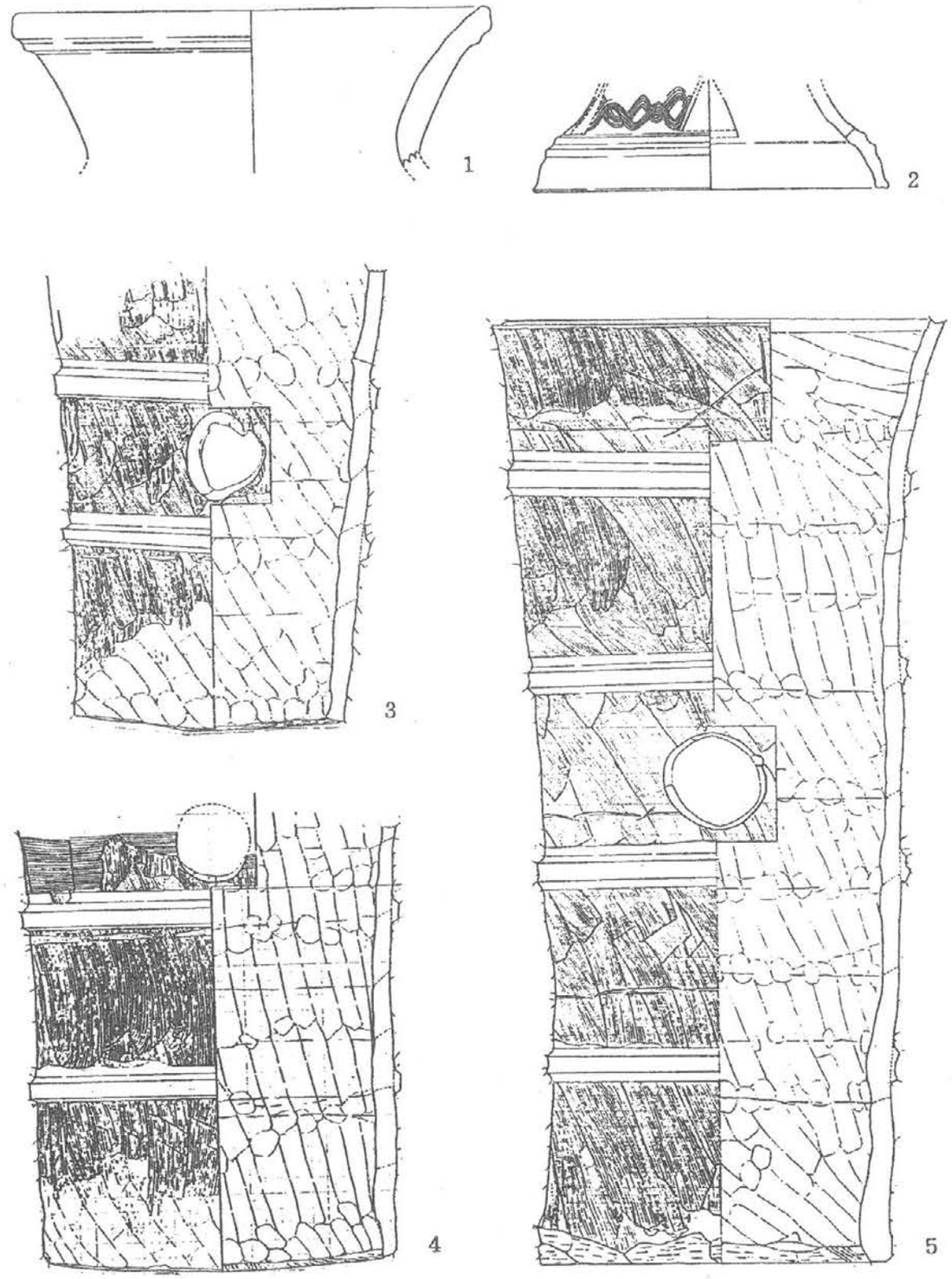
そして本調査の中でもっとも大きな発見が周溝底を清掃調査するうちに、陸橋の両側に各１本、他に３本の柱が立ったまま見つかったことであります。なぜ杭ではなく柱かといいますと、掘って埋めたと思われる掘り方が確認できたことと、これを引き抜いてみますと、杭のように先が尖っておらず柱状に平らに切断されていたことによります。

これら残っていた柱が、周溝の真中より少し外側のところを約４ｍ間隔で並んでいたことから一層溝の底をきれいに調査したところ、柱を立てるために掘った掘り方の痕跡が他に５ケ所検出されました。うち１ケ所から朽ちかけた柱の小さなものを新たに発見することができました。他のものは朽ちて既に土にかえったか、引き抜かれてしまったのでしょう。

松塚古墳位置図

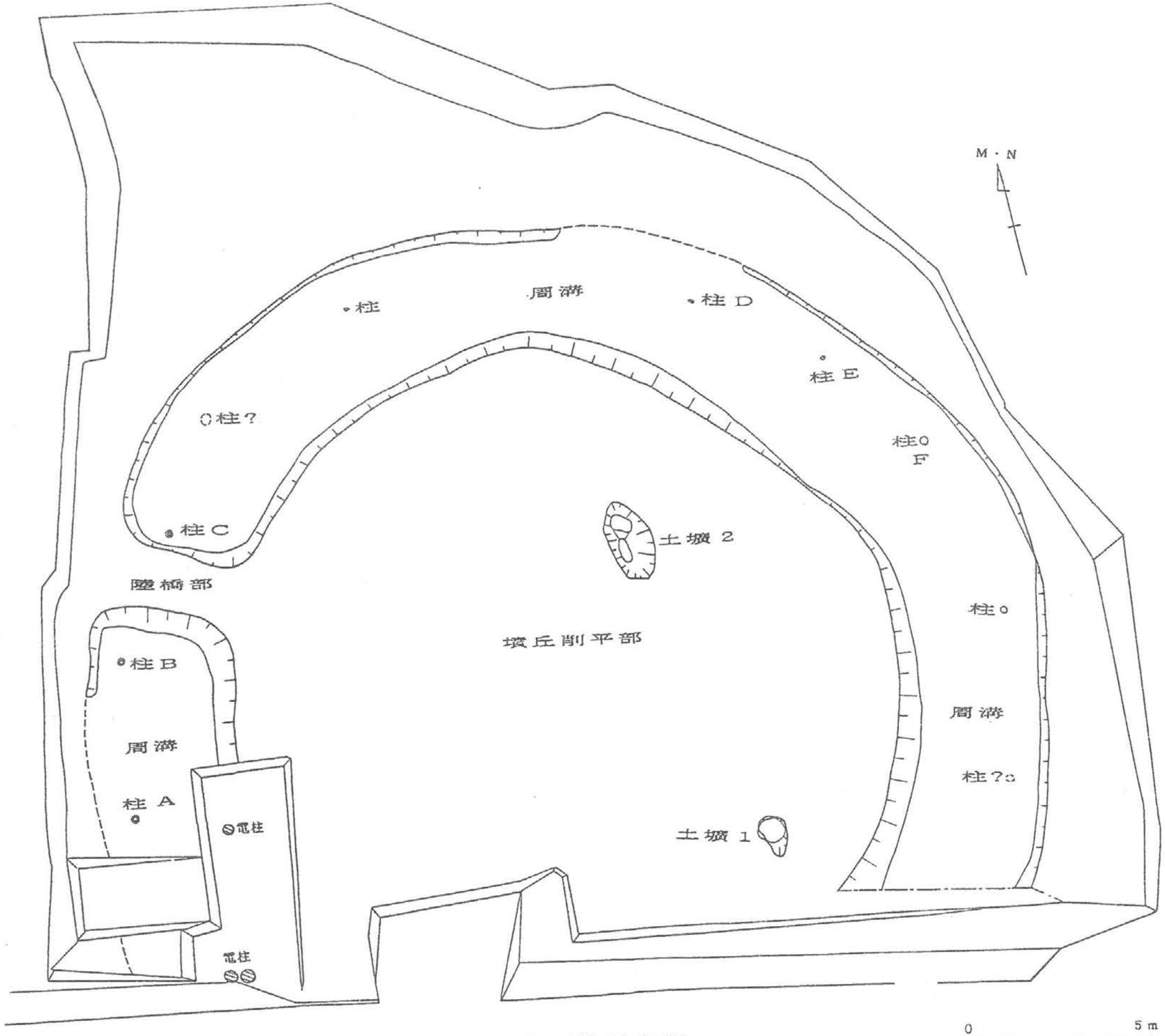


S＝1／10000



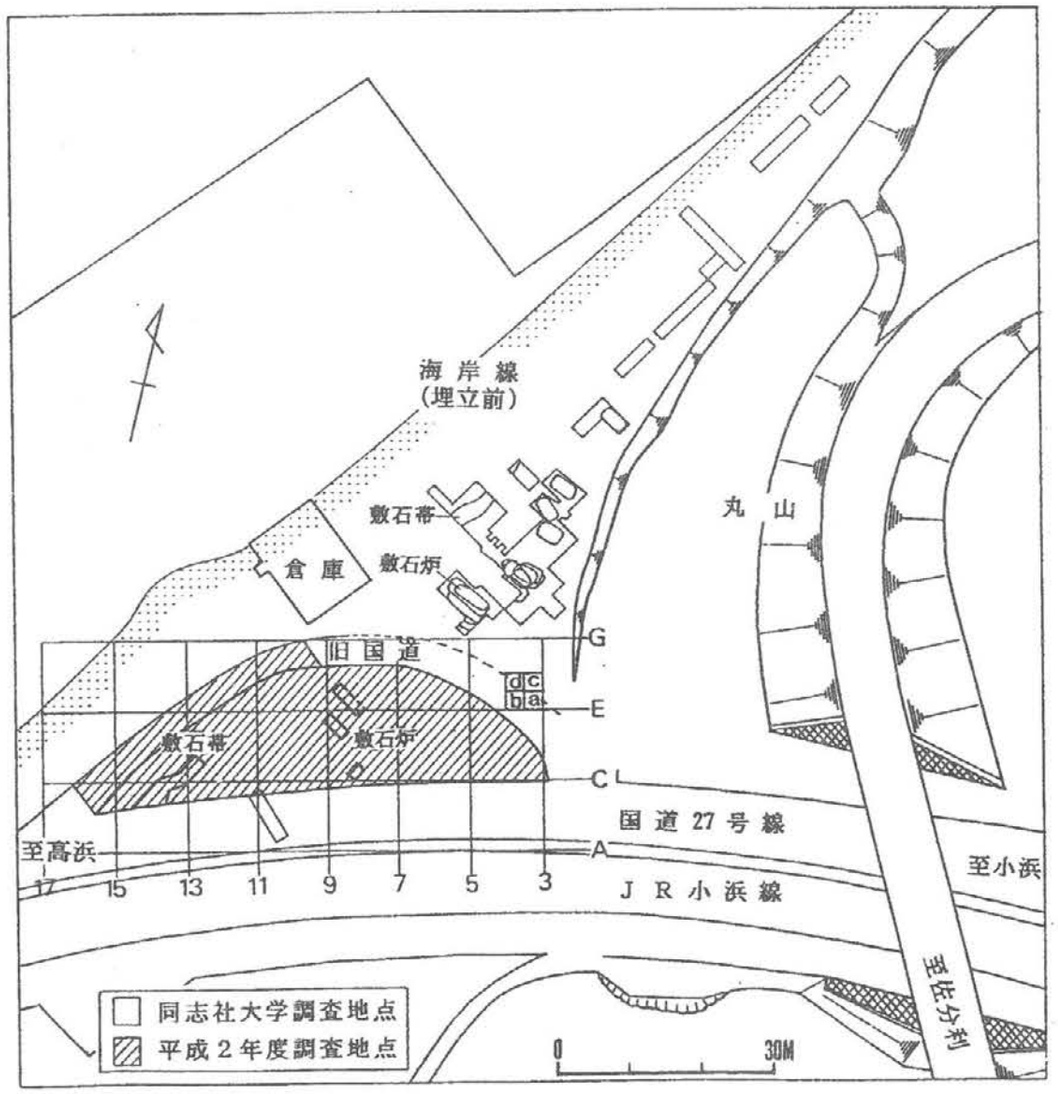
出土遺物実測図

1・2　須恵器　（S＝'　）　　3～5　円筒埴輪　（S＝1／4）



上中町松塚古墳

遺 跡 名　船岡遺跡
所 在 地　福井県大飯郡大飯町小堀30字東船岡 他
調査原因　国道27号船岡地係改良工事に伴う事前調査
調査主体　大飯町教育委員会
調査担当　福井県立若狭歴史民俗資料館
調査期間　試掘調査　平成元年12月６日～12月20日
　　発掘調査　平成２年５月10日～12月15日
調査面積　850㎡（試掘調査29㎡）
時　　代　奈良時代（土器製塩遺跡）



遺跡周辺の地形と調査地点（過去の調査地点は『若狭大飯』による）

《遺跡の発見と過去の調査》

遺跡の発見　1960年（昭和35年）に石部正志氏（当時同志社大学）によって発見された。

調査と地点　同志社大学によって1960年に試掘調査、1961年に本格的な発掘調査が行われた。調査は、製塩土器の濃密な散布がみられた旧国道より北側部分を重点的に行われた。

〔検出遺構〕

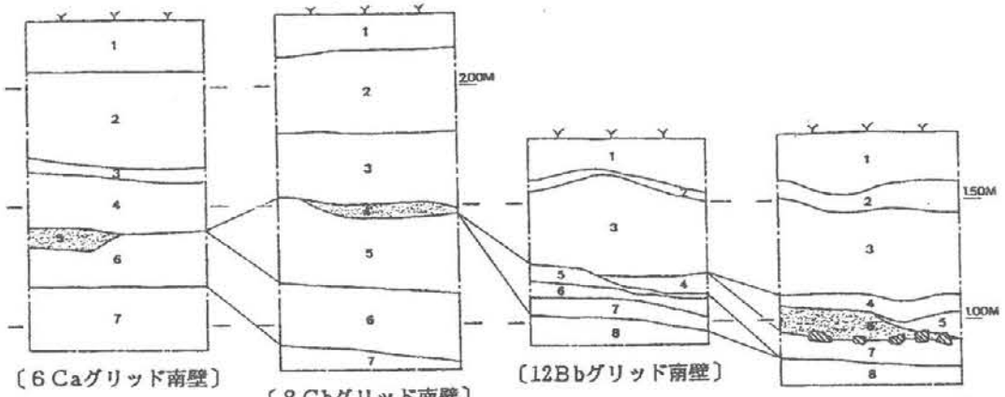
敷石炉　扁平な自然石や割石を密に敷き並べた長方形のもので、長軸が海岸線とほぼ直交するようにつくられている。６群17面確認された。

敷石帯　炉の廃材を海岸線に沿って帯状に敷いたもので、性格については明らかではないが護岸用列石と考えられている。

〔出土遺物〕

製塩土器（船岡式）、須恵器、土師器、土錘、弥生土器などが出土している。製塩土器に比べて須恵器、土師器など日用土器の出土量が極めて少ない。

この調査によって、船岡遺跡が敷石炉をともなった奈良時代の土器製塩遺跡であることが明らかにされた。また、日用土器の出土が極めて少ないことや敷石炉などが整然と配置され、数基の炉による同時操業が考えられること、さらに平城宮などの出土木簡から奈良時代には若狭が塩の一大生産地であったことなどから、塩生産を専業とする作業場であるとともに国家が管理する官営的製塩場ではなかったかと考えられている。



1 暗茶褐色土層
2 黄褐色混礫土層
3 砂　層
4 灰褐色粘質土層（旧耕作土）
5 灰色粘質土層（遺物包含層）
6 淡黄褐色土層
7 淡灰色砂礫層

1 暗茶褐色土層
2 黄褐色混礫土層
3 暗茶褐色土層（旧耕作土）
4 黒褐色混礫土層（遺物包含層）
5 砂礫層
6 淡黄褐色土層
7 淡灰色砂礫層

1 暗茶褐色土層
2 黄褐色粘質土層
3 暗茶褐色土層（旧耕作土）
4 砂礫層
5 赤褐色土層（整地土層）
6 砂礫層
7 黄赤褐色土層（整地土層）
8 砂礫層

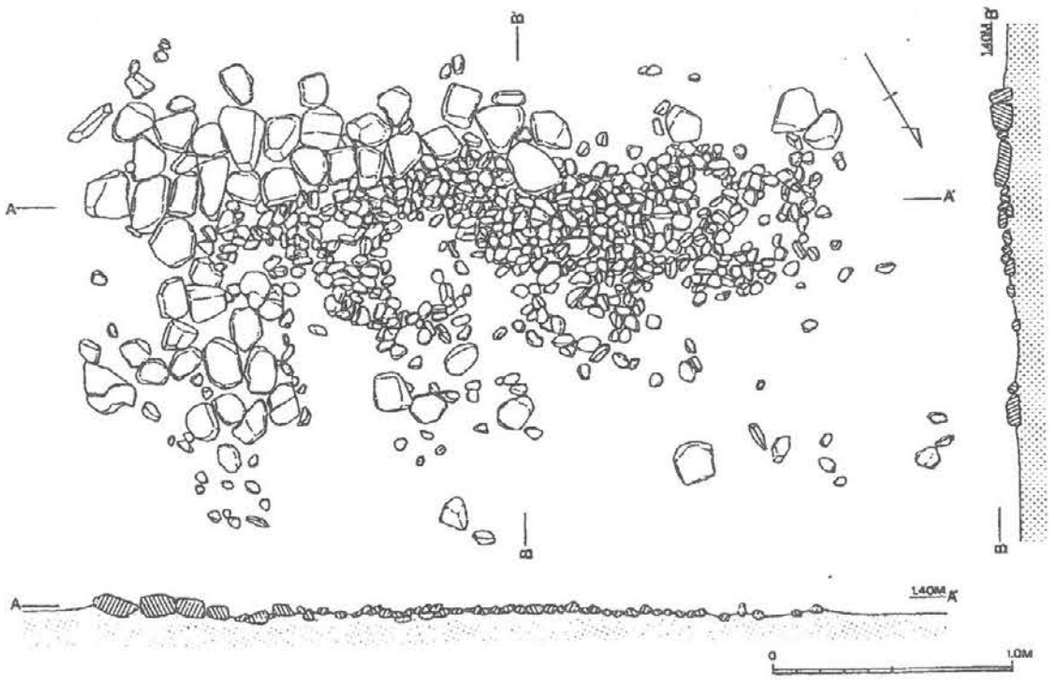
1 暗茶褐色土層
2 黄褐色粘質土層
3 暗茶褐色土層（旧耕作土）
4 砂礫層
5 砂　層
6 黒褐色土層（遺物包含層）
7 砂　層
8 砂礫層

各地点の層位（1/30）

《発掘調査の概要》

今回の発掘調査は、国道27号線と旧国道とに挟まれた半月状の畑地となっている部分について行った。船岡遺跡は、埋め立て前の海岸線に沿ってほぼ南北にひろがりをもつものと思われ、今回の調査地点は、遺跡の中心からやや南寄りのところにあたる。

調査の対象となった畑地は、大飯原子力発電所１・２号機建設時に資財置場となっていたこともあって全域にわたり埋め立てられており、旧耕作土の上には東側では約70cm、やや低い西側でも約40cmの厚さで黄褐色土などが入れられている（各地点の層位図参照）。旧耕作土下は、調査区の東側では山石を含む砂礫層やシルト層の上に黄褐色土が堆積し（６Ca 南壁６・７層）、これらの層を溝が切り込んでいる。一方、西側では黄褐色土の上にさらに砂礫層が堆積し、海岸へとつづいている（８Cb 南壁５層、12Bb・13Bb 南壁８層)。この砂礫層上面の海岸までの平坦地や海岸斜面に炉石や赤褐色土（整地土）が敷かれている。また、海岸斜面には製塩土器が多量に廃棄されており、赤褐色土の上に砂や礫が堆積した後、黒色土帯と称した黒褐色土（13Bb 南壁６層）が10～20cmの厚さで堆積している。なお、調査区西端の海岸斜面には、製塩土器の廃棄に先行して敷石遺構がつくられている。



２号炉跡実測図（1/30）

〔検出遺構〕

炉　跡　今回の調査では３面検出した。いずれの炉も調査区西側の砂礫層の上に、炉面が水平になるようにつくられている。３面の炉のうち、２号炉は当時の形状をとどめているが、１・３号炉は後世の攪乱によって壊され、部分的に残存している。しかし、２・３号炉は長軸が海岸線と直交するようにつくられており、１号炉も北西側の一辺が２号炉の短軸と平行関係にあり、それぞれの炉が規則性をもって配置されていることがうかがえる。１～３号炉には下記のよう特長がみられる。

１号炉　石を密に敷き並べる形態の炉であるが、炉石には割り石が用いられている。（残存長1.8×2.0m）

２号炉　周囲に扁平な比較的大きな石を配し、その内側に栗石を敷きつめる形態の炉である。また、炉の南東側には溝が掘られ、雨水などの流入を防ぐための配慮がされている。（残存長1.7×3.2m）

３号炉　周囲に扁平な石を配し、内側に栗石を敷きつめる２号炉の形態に類似する。（残存長1.0×4.5m）

赤褐色土面　炉がつくられている海岸までの平坦地から海岸斜面にかけて、砂礫層の上面に山石を含む赤褐色土が敷かれている。厚いところでは10～15cmの厚さで敷かれているが、赤褐色土の上面と下面とで色調の変化はみられず、火を受けることによって赤変したとは考え難い。

海岸までの平坦地では、約２mの幅で方形に囲むように敷かれており、２区画検出した。そのうちの１区画に２号炉がおさまっている。海岸斜面に敷かれた赤褐色土は、波浪による作業面の浸食を防ぐためのものと思われるが、平坦地に敷かれた赤褐色土については、作業道的な機能と同時に作業面を区画するものかもしれない。

ピット　炉の周辺に集中して掘られているが、大きさや配列、間隔など規則性に欠ける。

土　壙　平坦地から海岸斜面にかけて、赤褐色土やその下の砂礫層を方形に二段に堀り込んでおり、海側が開放している。縦2.0m、横1.8m、深さ0.2mである。 土壙は海岸斜面に製塩土器などが多量に廃棄される段階で埋められている。

敷石遺構　赤褐色土が敷かれてから後、土壙より西側の海岸斜面に、炉の廃材を約1.5m幅で海岸線に沿って敷いている。平面的には四つのブロックに分かれるが、重複やレベル差はみられず、一時期に一気に敷かれたものである。石は比較的密に敷かれているが、炉石と異なり上面を平坦にしようという意識がみられない。むしろ平たい面を斜面に沿わせて敷いている。

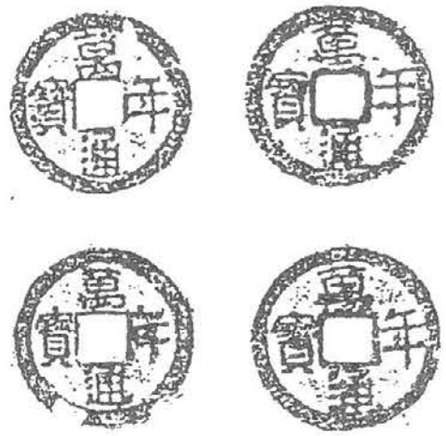
溝　調査区東側の黄褐色土やその下のシルト層、砂礫層を南東から北西方向に傾斜するように堀り込んでおり、溝の下面には5～10cmの厚さで砂が堆積している。遺跡南側の山地から流れ出る谷水による自然流路と考えている。この溝によって旧国道北側の炉群と今回検出した炉群とが分断されており、溝内にはそれぞれの炉群で使用された製塩土器が溝の北側と南側とから廃棄されている。

〔出土遺物〕

遺物はコンテナ（容量約29ℓ）90箱出土したが、そのほとんどが細片化した製塩土器である。出土した主なものは、製塩土器、須恵器、土師器、土錘（4）砥石（2）、萬年通寶（4）で、製塩土器は外面に粘土紐のつなぎ目を残す厚手の船岡式製塩土器である。これらの遺物の大半は、黒色土帯、溝、炉の周辺から出土したものである。

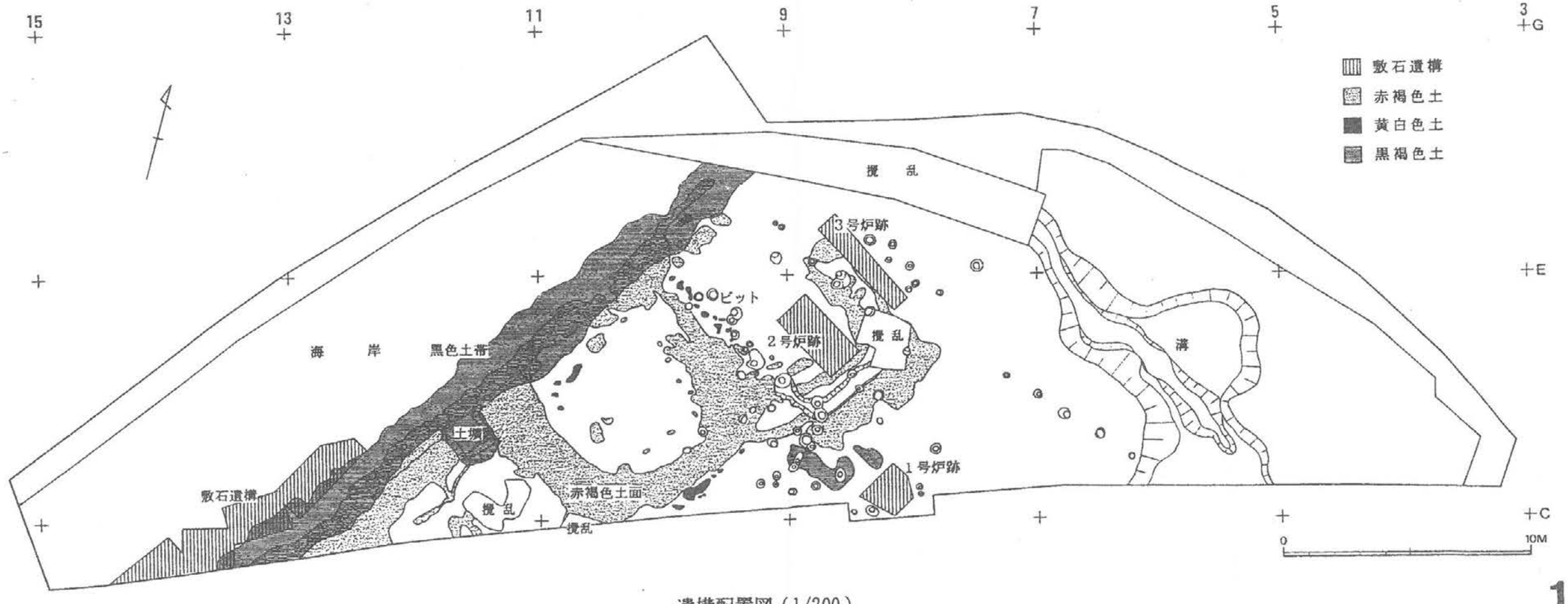
萬年通寶は、土壙北側の海岸斜面から比較的まとまって出土しており、土壙近辺で何らかの祭祀が行われた際に使われたものと思われる。廃棄された時期は、海岸斜面に赤褐色土が敷かれ、土壙が堀り込まれてから製塩土器などが多量に廃棄されるまでの間である。

船岡遺跡における製塩活動は、萬年通寶の出土によって、760年までは確実に行われていたことが明らかとなった。また、製塩が開始された時期は、出土した土師器から7世紀後半頃にもとめられるが、詳細についていは遺物整理が終了した段階で明らかにしたい。



萬年通寶
皇朝十二銭の一つで、760年（天平宝字4年）に鋳造された銅銭。

萬年通寶（実物大）



遺構配置図（1/200）